國學院大學学術情報リポジトリ

ヨーロッパ日本研究協会の国際会議

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001563

ヨーロッパ日本研究協会の国際会議

ベルギーのゲント大学日本研究所の主催により実施された、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）第17回国際会議で、平藤喜久子らがパネルディスカッションを行った。概要を以下に記す。

■開催概要

【日時】８月20日14：00-15：30（現地時間）

【開催方式】対面（ゲント大学）とzoomのハイブリッド形式

【題目】Shinto readings of the Other during the interwar period

【登壇者】

司会：平藤喜久子（國學院大學／日本文化研究所所長）

討議者：エミリー・アンダーソン（全米日系人博物館）

発表者：

平藤喜久子（國學院大學／日本文化研究所所長）

Shinto to rule Asia: Japanese mythologists of the imperial period

エリック・シッケタンツ（國學院大學／日本文化研究所兼任教員）

Fujisawa Chikao and the mythopolitics of empire

矢崎早枝子（イギリス グラスゴー大学／日本文化研究所共同研究員）

Shinto meets Judaism and Islam in imperial Japan: the role of schools in knowledge formation

ダーヴィッド・ヴァイス（九州大学）

Close others and techniques of translation: Shintō's role in colonizing Korea

■発表要旨

1868年の明治維新後、日本が近代化の道を歩み始めた頃から、海外に出る日本人が増え、外国人が日本を訪れるようになった。この交流により、外国の文化や伝統に触れる機会が増えた。キリスト教は日本に大きな教育的・文化的影響を与えたが、他の一神教も日本人の出会い、特に国内外のユダヤ教徒やイスラム教徒との出会いによってもたらされた。それらは日本の植民地にも存在した。日本が領土を獲得するにつれ（1895年台湾、1910年朝鮮、1931年以降満州、中国、東南アジア）、大日本帝国はますます多民族・多宗教国家になっていった。1931年の満州事変とそれに続く日本のナショナリズムの台頭の後、神道は、これらの獲得した領土の豊かで多様な宗教的伝統（その多くは日本人にとって極めて異質なものであった）を統合する枠組みとして利用された。

本パネルでは、ナショナリズムが最高潮に達した戦間期から戦時期にかけて、多宗教の植民地国家に住む日本人が、神道というレンズを通して外国の伝統を見た様々なアプローチを検証する。神道が、朝鮮宗教、ユダヤ教、イスラム教、一神教、世界文明一般など、他の伝統を理解する上でどのような枠組みを提供したかを探ることを通して、パネルディスカッションでは、他者に対する知識や視点がどのように形成されたかも取り上げる。

（平藤喜久子）